共産主義者組織統一 準備委員会会報

1

1966年5月1日発行

目次

組織統一準備委員会会報発刊にあたって	1
第二回組織統一準備委員会の概要	2
第一回組織統一準備委員会の概要	10
会報についてのお願い	11

組織統一準備委員会会報発刊にあたって

「結集と統一をめざす全国会議」がひらかれてからすでに一カ月あまりがすぎました。この間に共産主義者の結集の事業は全国でさまざまな形をとりながら、全国の同志の活発な討論と行動を通じて前進しています。組織統一準備委員会は、この結集の仕事をさらにおしすすめるため、四月一六、一七日に開かれた第二回準備委員会で「組織者としての任務を持ち、準備委員会活動の報告、全国各地の活動状況、結集をめぐる意見の交流および準備委員会の活動を前進させるための積極的提案、問題提起」などをもつた「会報」を出すことをきめました。「会報」は原則として月二回発行いたします。第一号は、第三七回メーデーを期して発行し、とりあえず第二回準備委員会の報告をおとどけしますが、編集委員会としては内容のある機関誌をつくり、全国の同志諸君の期待にこたえるため全力をあげる決意でありますので、結集を指向する全国、各戦線の同志、共産主義グループの積極的寄稿を期待しています。結集を、前進をねがうすべての共産主義者の共同の事業として発展させるため、諸同志のご協力を切望します。

編集委員会

第二回組織統一準備委員会の概要

組織統一準備委員会事務局

第二回組織統一準備委員会は、四月十六日、十七日の二日間、東京でひらかれた。

全国会議で選出された二十八名の準備委員中、二名の同志が承諾を保留しているため、現在の構成員は、二十六名であった。このうち、神山、毛利、宮田、兵庫、白鳥、佐久間の六委員は、病氣、大衆運動の關係、その他の事情から欠席した。

会議は、全国会議直後の第一回準備委員会から今日にいたる経過報告をふくむ志賀委員長の開会のあいさつではじめられ、内野、春日、鈴木の三同志を議長団に選出した。

二

「準備委員会の活動計画と編成について」の常任委員会提案が、内藤事務局長から報告された。

報告の項目

(一) 準備委員会の活動計画

- (1) 政治方針案の作成と政治方針委員会の設置
  - (2) 組織方針案の作成と組織方針委員会の設置
  - (3) 政治・組織方針の作成の基礎としての日本共産主義運動の歴史的検討
  - (4) 結集のための組織活動
    - a 大衆闘争との關係。戦線別委員会の設置。これと政治方針委員会との關係
    - b 諸集団との共闘・交流
    - c 準備委員会活動への参加、協力をもとめる活動
    - d 地域的結集と基礎組織（とくに近代的大経営における）の確立の努力
    - e 準備委員会への参加者名簿
- (2)

(5) 日程

(二) 準備委員会の編成

(1) 内規

(2) 政治方針委員会、組織方針委員会の編成

(3) 戦線別委員会責任者

(4) 事務局員

(三) 財政

(四) 会報

三

報告の討論にあたって、最初に提起された問題は、準備委員会が、現在の時点で、まず何からはじめるべきかということであった。

全国会議が終り、「まとめ」と「よびかけ」が発表された段階で、各地方、各集団などの反響が、それぞれの準備委員から報告された。「まとめ」と「よびかけ」の発表がおくられたため、まだ十分つかまれているとはいえないが、全国会議前よりも、積極的な関心の生まれていることが確認された。

そして、この時点での準備委員会の最も重要な任務は、「よびかけ」で「具体的討論と行動を開始する」ようよびかけているのであるから、その組織化に全力をあげ、広範な結集のために努力すべきであるということが強調され、確認された。

「まとめ」と「よびかけ」の普及、討論の組織化、「まとめ」と「よびかけ」にもとずいて準備委員会への参加を訴え、組織活動を進めること、このなかで、全国会議や準備委員会になお疑問をもつ人びととの積極的な討論と交流を通じて、その疑惑を解き、批判的意見に耳を傾け、その積極的批判を吸収して、今後の準備委員会活動に生かすべきことが決められた。

この活動のために、「まとめ」と「よびかけ」のリーフレットを作成すること、準備委員会活動への参加をもとめ、組織化するために、参加申込書をつくることを決めた。

(3)

準備委員会への加盟ないし参加は、地方の組織が確立されていない現在、全国準備委員会が直接とりあつかい、地方の組織がその具体的条件に応じた形態で確立されるにつれ、そのとりあつかいを考慮してゆくこととした。

この点では、準備委員会段階での組織的参加をもとめることは相当困難であるという意見もだされ、準備委員会と連絡をたもちつつ、その活動を見さだめたりえ結党の時点で参加するという人びともあることを考慮し、柔軟、多様な方法で結集のための組織活動を進める必要があることが指摘された。

五

これらの討論の結果、組織活動の武器としての会報の問題、これと関連して財政の問題を議事進行上、先に扱うこととなった。

会報については、機関紙の性格のものと討論誌の性格のものとを、区別して出すべきであるという意見、それを統一して出すべきであるという意見、現在の物質的条件から討論誌は無理であるという意見、体裁など考えなければ十分財政的にも可能であるという意見などがだされた。討議は、準備委員会の当面の任務をどこにおくかの問題とも関連して進められた。討論を組織する場合には、何を討論すべきかを明確にし、重要な政治活動として、責任ある素材を提供して行なうべきであるという意見、「まとめ」と「よびかけ」で討論を訴えているのであるから、これを肉づけし、発展させる積極的意見を機関紙に反映し、経験の交流に役立てるべきであるという意見などがだされた。討議は機関紙の性格の問題と当面する準備委員会の任務の問題とが、混然と論じられたため、相当の時間を費した。機関紙は組織者としての性格をもつものであり、それは準備委員会の任務と当面の活動の重点に従属する。このことを確認し、討論を整理することがもとめられた。

その結果、会報の問題については、議長団の次のまとめを全員で確認した。

(1) 会報は機関紙として、組織者の任務をもつ。

(2) その内容は、準備委員会活動の報告、全国各地の活動状況、結集をめぐる意見の交流および準備委員会の活動を前進させるための積極的な提案、問題提起などで編集

(4)

される。

(3) その規模は、準備委員会の今日の物質的条件を考慮して決められる。

六

財政については、常任委員会から二つの案、A案（独自の事務所をもつ）、B案（事務所を「こえ」か「社革」またはどこかに借りる）が出され、いずれの政治組織にも所属しない準備委員から、とくに独自の事務所をもつての積極的な方針が主張された。結果のため活動全体をひろめ、活潑にすることと不可分に結びついた積極的な方針を確立すべきことが強調された。その結果、独自の事務所をもうけるという方針をきめ、次の予算が確認された。

- (1) すべり出し資金として、準備委員一名当り、一万円以上を早急に集める（おそくとも二カ月以内に完納）。
- (2) 財政委員会を設けて、計画をたて、百万円の資金をつくる。
- (3) 会費は、個人で参加する者は月額百円（入会金百円）。組織の場合は、構成員一人当り月額百円に相当する毎月分担金を、その機関が責任をもつておさめる。
- (4) 以上の収入の見通したつて、毎月支出の予算の大綱を確認。四月度から実施することとなった。

七

政治方針委員会と組織方針委員会の設置をめぐって、活潑な討論がおこなわれた。

政治・組織方針をどのような過程をへてつくりあげるかについて、意見が集中した。これらの方針を作成するために、日本共産主義運動の歴史的検討をどのように位置づけるべきかという問題、さらに、このことが当面広範に結集をすすめてゆく任務とどのような関連をもつかという問題が熱心に討議された。これはまた何からはじめるべきかの問題、会報の問題の討論を通じて、一貫して追求された問題でもあった。

- (5) 一つの意見は、政治方針委員会、組織方針委員会の設置を時期尚早とする意見であった。日本共産主義運動の歴史的検討を行うためにも、その主体的条件を確立する必要がある、そのためには今日なお結集していない諸集団との討論を経て、その結集に努力し、主体的

条件を確立することがまず必要である。それぞれの集団が分岐をつづけてきたのにはそれだけの理由がある。それは、われわれの間に、イデオロギー的統合力の点でも、多様な政治経験の統一の点でも、欠けるものがあることを示している。この党形成に必要なものをどうしてつくりだすかが重要である。これまで代々木を批判した者のうちにあった綱領主義や思想闘争の弱さを自己批判し、これらの歴史的経験を総括して、イデオロギー的統合力と、政治経験を集中して、統一を達成する主体的条件をつくる努力が、まずなされる必要があるという意見であった。また、「まとめ」「よびかけ」の討論が今始まろうとしている時点で、早急に二つの委員会の作業を始めることは、まだ結集していない人びとを無視して、準備委員会が独走するという結果になり、結集の事業をさまたげるという意見もだされた。さらに、かつての綱領主義的傾向の批判と同時に、自立した共産主義者集団が思想改造を第一義として相互交流を経て組織統一をめざしたコースも成功していない経験をも見るべきであり、新しく組織を建設するにあたっては、これらの経験から十分教訓をひきだすことが必要であり、当面はオルグ活動に全力をあげるべきであるという主張がおこなわれた。

- もう一つの意見は、広範な結集のために当面全力をあげることに、組織方針委員会と政治方針委員会を発足させることは矛盾するものではないという意見であった。「まとめ」と「よびかけ」は大きな関心をよびおこしているが、多くの人びとは、それがどんな政治方針、組織方針となつて具体化されるかを注目しているのであり、むしろそれによつて参加するかどうかを判断しようとしている。この作業に着手し、それによつて結集をひろげることが可能であるという意見がだされた。また、われわれは、無から出発するのではなく、ここに参加した組織あるいは個人は、それぞれ蓄積をもっており、作業を始めるだけの基礎はあるということも主張された。また、思想的・理論的追求は必要であるが、同時にこの結集が終点ではなく、今後の追求の可能性が保証されることが重要なのであつて、その点を明確にし、全国的な観点で、政治的速度を考慮されたいという意見が出された。さらに、「綱領主義」「自立主義」の反省の上に結集を進めることは全く異議ないが、「まとめ」と「よびかけ」のなかには、こういう経験もふまえ
- (6)

て、一つの政治組織に結集しうる等質性の基本的なものが、すでにあるのではないか。イデオロギー的統合力の形成や政治経験の統一は、たとえ不十分であっても一つの政治組織に結集しての共同の政治生活のなかでこそ、むしろ前進させることができるのであり、分立したままの討論と総括から、それを生みだそうというのは非生産的である。「まとめ」と「よびかけ」を基礎に、政治方針、組織方針をつくる過程で、また結集しての党活動のなかで、それを生みだすべきであることが主張された。

第二回準備委員会は、時間の制約から、この問題で完全な意思統一を果しえなかつた。しかし、以上の討論にたつて、次のことを決定した。

(1) 政治方針委員会、組織方針委員会を設けることを決める。しかし、その具体的編成は次の準備委員会で決める。

(2) それまで、在京の準備委員および出席可能な準備委員で、二つの方針の基礎にある問題や、それをどんな方法でつくつてゆくか、どういう内容がもとめられているか、さらに、どんな委員会の構成にするかなどを検討し、今回の提案の準備をする。

この決定の(1)については、石井実同志が保留した。

八

戦線別委員会の問題については、当面する諸闘争の共同行動を進展させ、大衆闘争にねざして党を建設することの重要な意義が確認されたが、既存の戦線別共同行動組織との関係が十分考慮される必要があり、また政治方針の作成との関連をも考慮しなければならぬので、この問題も、次回まで、さらに検討を進めることとした。

九

「まとめ」と「よびかけ」の出された今日の段階で、結集に参加していない共産主義諸集団との話し合いを行うことを決定した。

さらに、地域的結集を進めるため、次回までに、すくなくとも名古屋に、準備委員会代表を派遣することが決められた。

十

準備委員会の内規として、次のことが決められた。

(7)

- (1) 準備委員長は、準備委員会の責任者である。
- (2) 常任委員会は、準備委員会の活動を円滑に進めるための活動を行う。
- (3) 事務局は、準備委員会の日常業務を行なう。事務局長は、その責任者である。事務局員は、準備委員会で決定する。

十一

事務局員に戸原駿二同志を決定。

事務所は新設するまで、仮事務所を日本共産党（日本のこえ）に置く。

十二

会議は亀山幸三同志からよせられた意見をとりあげ、次のことを決定した。

- (1) 会議の決定や、議事録など、準備委員会としての公的なものは、準備委員会が責任をもち、事務局を通じて発表する。
- (2) それぞれの参加組織が、準備委員会の活動について、その機関紙で報道し、独自の批判意見を発表することは自由であるが、決定、議事録の類は事務局発表によるべきである。

十三

準備委員会は、財政委員と会報編集委員を決定した。

編集委員 内野壮児、西本一男、小野 弘

十四

会議は、中央メーデーに、共産主義者組織統一委員会として参加することを決めた。

このさい、全国会議で決められた正式の名称は、組織統一準備委員会であるが、一般に対外的には、共産主義者組織統一準備委員会とすることが了解された。

十五

浅野同志の提案により、神山同志の病氣入院を見舞うカンパが会場で行なわれた。

全国会議で選出された準備委員

(五十音順)

浅野 太郎 (戦線別)	兵庫 一郎 (兵庫)
い い だ も も (")	松江 澄 (社革・広島)
石井 信雄 (こえ・静岡)	宮田 圭一 (東京)
石井 実 (戦線別)	毛利 一雄 (戦線別)
内野 壮児 (社革)	漁 正雄 (社革・大阪)
小野 弘 (戦線別)	(この外、交渉中二名)
春日 庄次郎 (統一有志会)	(括弧内は選出母体。地域名のみの場合はその地方のグループの代表)
神山 茂夫 (こえ)	
佐久間 博 (岩手)	
志賀 義雄 (こえ)	
白川 昇 (戦線別)	
鈴木 市蔵 (こえ)	
柴田 三郎 (東京)	
白鳥 良香 (静岡)	
津京 良次 (こえ・大阪)	
内藤 知周 (社革)	
西本 一男 (東京)	
長谷川 進 (社革)	
原 全五 (統一有志会・大阪)	
一柳 茂次 (戦線別)	
平野 和一 (")	

(9)

第一回組織統一準備委員会の概要

組織統一準備委員会事務局

一 第一回組織統一準備委員会は、三月二十三日、全国会議で選出された直後、全国会議に出席していた準備委員をもつて開かれた。

二 委員長に志賀義雄、事務局長に内藤知周、常任委員に、鈴木市蔵、内野壮児、春日庄次郎の各同志を選出した。

三 準備委員会は、全国会議の「まとめ」と「よびかけ」の成文化を在京・東京近県の準備委員に一任した。

四 原則として準備委員会を毎月一回、常任委員会を週一回ひらくことを決めた。

「まとめ」・「よびかけ」の

リーフレットができました

☆ このリーフレットを、当面の結集の武器に活用して下さい。

☆ 二十部以上は、原価一部五円でおわちします。前金で買いつつて、組織活動に使ってください。

☆ 一部売り十円とし、すべりだしの資金活動にも御利用ください。

☆ 御注文は、組織統一準備委員会事務局へ

「会報」についてのお願い

本会報のご購読を希望される方は左記によりお申込み下さい。

- (一) 発行回数 原則として 月二回
- (二) 誌 代 月額一〇〇円(送料共)
- (三) 直接購読希望者は現金書留その他の方法で誌代(なるべく六カ月分以上)を
そえてお申込み下さい。誌代前納者にはのみおわちいたします。
- 四 誌代の送付先は組織統一準備委員会仮事務所です。

組 織 統 一 準 備 委 員 会 事 務 局